

# 《参考資料》八幡太郎義家と桜

## 八幡太郎義家（源義家）

源義家は「天下第一武勇の士」と呼ばれ、弓矢をひくのがとても上手だったといひます。また歌才もあり、文武両道の人物として後世まで慕われている人物です。

清和源氏の源経基を祖とし、後の頼朝に繋がる 石清水八幡宮で元服し、八幡太郎義家と呼ばれた 前九年の役、後三年の役で活躍し、東国での源氏の安定した基盤が築かれていく しかし、後には義家と弟の義綱との家臣間の抗争、義家の息子間の後継者問題で大いに悩まされることになる

この源義家が詠んだ歌が千載和歌集に収められています。

〈陸奥国(みちのくに)にまかりける時、勿来(なこそ)の関にて花のちりければよめる〉

吹く風をなこそその関と思へども道もせにちる山桜かな

訳:「来る勿れ」という名を持つ勿来の関であるのだから、吹く風も来ないでくれと思うのだが、道をふさぐほどに山桜の花が散っているよ。

白坂下の桜 (石川町)	源義家が奥州征伐の折、記念に植えた桜が枯死した後にその名跡を継ぐために植えたという。
秋山の駒桜 (川俣町)	八幡太郎義家の駒止め桜の伝承がある桜 エドヒガン 樹齡:約500年 高さ:21m 胸高幹回り:5.4m
阿武隈川と 稚児の舞台 (東和町)	対岸の岩棚を稚児舞台と呼ぶのは、源義家の伝説から。 前九年の役(1050年頃)、源氏と急流を挟んで対峙していた安部貞任軍。 弓矢を交えての戦闘のさなか、敵前で舞いを舞った貞任の幼い2人の娘は、恥をさらしたとして岩山から身を投じた。このことから、対岸の岩棚を稚児舞台と呼ぶようになった。そして、このあたりに咲く「ゆきやなぎ」を稚児桜と呼ぶようになったとされている。
合戦場の桜 (二本松市 旧岩代町)	合戦場(かっせんば)の地名は通称で、この桜がある高台で、平安時代の後期、源義家(八幡太郎1019~1062)が安部貞任・宗任兄弟と戦った場所といわれている。 2本の桜が寄り添うようにあるので、当初「大林の夫婦桜」と呼ばれていたが、昭和62年5月岩代町教育委員会から天然記念物に指定を受けた際、「合戦場のシダレ桜」と命名された。 樹齡:約200年 胸高幹周り:2.95~3.6m 2本 紅枝垂れ桜
馬場桜 (大玉村)	別名「駒止めの桜」と呼ばれ、源八幡太郎義家が土に差した桜のムチが根付いたと言われている。

<p>檜葉八幡神社の桜（広野町）</p>	<p>1050年に源義家が勧請した神社の境内に咲く老樹。</p>
<p>勿来の関の山桜（いわき市）</p>	<p>源義家が「吹く風をなこそそのせきと思えども道もせに散る山桜かな」と詠んだ地。</p>
<p>八乙女種まき桜（山形県白鷹町）</p>	<p>後三年の役の際、源義家がこの地に京都岩清水八幡宮を勧請し、八人の乙女の舞を奉納したことから八乙女丘、八乙女八幡宮と称するようになったといわれています。奥州藤原氏の時代、この丘に荒川次郎が築城し、八乙女城と称されました。境内には「八乙女種まき桜」があり、荒砥城主の桑島和泉守が庭先に植えたものといわれています。 昔はこの桜の咲いた時が、春の苗代に種をまく好期としたことから、通称「種まき桜」と呼ばれてきました。</p>
<p>釜の越の桜（山形県白鷹町）</p>	<p>推定樹齢800年といわれるエドヒガンザクラの巨木の大きさは現在県内随一。桜のシーズンともなると、そばにある自身の子どもの樹齢70年の勝弥桜とともに一帯の公園を鮮やかに彩ります。 「釜の越」は地名。樹下にある3個の巨石は、八幡太郎義家（源義家）が西方の三面峰（テレビ塔が見える山）に居陣したとき、この石でかまどを築き、兵糧を炊いたとの伝説があります。したがって、地名の「釜」はこの伝説に関わりがあると思われ、また、この石に炒り豆を上げて拝むと歯が強くなると言われています。 近年桜の具合が悪くなっていて、できるだけ早く元気を取り戻してもらおうようみんなが願っています。‘04年「ぼくがそばにいるよ〜」の『桜』が大ヒットした河口恭吾さんもその一人。釜の越桜の樹勢回復のために白鷹町でチャリティーコンサートを実施。</p>
<p>安久津八幡神社の桜（山形県高畠町）</p>	<p>安久津八幡神社は慈覚大師が建立したとか、源義家が後三年の役 of 戦勝祈願として建立したとか言われる神社です。 本殿は何度となく火災に見舞われ、再建されたもので、現在の本殿は1743年に焼失した社殿を1765年に再建したものです。 本殿は近世建築ながらその手法が優れ、江戸時代を代表する建物として、昭和30年に山形県の有形文化財に指定されています。  また、安久津八幡神社の三重の塔は山形県唯一の神社にある三重の塔になります。</p>

<p>鶴岡八幡宮 「若宮大路」 (神奈川県 鎌倉市)</p>	<p>鎌倉八幡宮 『鶴岡八幡宮』より:名称=鶴岡八幡宮所在地=神奈川県鎌倉市祭神=応神天皇比売神神功皇后社格=国幣中社・別表神社創建=康平6年(1063年)例祭=9月15日鶴岡八幡宮(つるがおかはちまんぐう)は神奈川県鎌倉市にある神社。河内源氏武家源氏、鎌倉武士の守護神。鎌倉八幡宮とも呼ばれる。康平6年(1063年)8月に河内国(大阪府羽曳野市)を本拠地とする河内源氏2代目の源頼義が、前九年の役での戦勝を祈願した京都の石清水八幡宮(あるいは河内源氏氏神の壺井八幡宮)を鎌倉の由比郷鶴岡(現材木座1丁目)に鶴岡若宮として勧請したのが始まりである。永保元年2月には河内源氏3代目の源義家(八幡太郎義家)が修復を加えた。</p> <p>若宮大路、二の鳥居から三の鳥居の段葛には、約300本の桜が咲き、見事な桜並木になる。 【ビューポイント】若宮大路二の鳥居付近 【桜祭り】4月8日～4月15日 鎌倉まつり 8日にはパレード、15日には流鏝馬が実施されます。 【夜桜】4月1日～4月15日 夕方～翌朝 段葛に約400個のちょうちんが点灯</p>
<p>八幡太郎義家と 前中納言匡房 (大江匡房)</p> <p>前中納言匡房 さきのちゅうなごん まさふさ (1041～ 1111)大江匡房。 大江成衝の息子。 大江匡衡 と 赤 染衛門の曾孫に 当たる</p>	<p>武将として名高い 八幡太郎こと 源義家が、ある日戦ばなしをしていたところ、匡房が「好漢、惜しむらくは兵法を知らず」とつぶやいた。それを伝え聞いた義家は、匡房に弟子入りし兵法を学んだという。頭が良過ぎて世を憤り、山に隠れようとしたが、藤原経信の 諫めで思いとどまったこともあった。</p> <p>「内のおほいまうち君の家にて、人々酒 たうべて 歌詠み侍りけるにはるかに山の桜を望むといふ 心をよめる」が詞書。</p> <p>内のおほいまうち君 とは 内大臣藤原師道のこと、宴会上の歌。墨絵的な霧立つ山峰に、美しくほのかな一斤染めの桜。幽玄的で、格調高い一幅の絵のようである。</p> <p>読み人知らずの「山ざくらわが見にくれば春がすみ 峰にも尾にも立ちかくしつ」の本歌取りであるとされる。</p> <p>《高砂》高い砂の集まって出来た山の意で、地名ではない。 《尾上》高い山の上、峰の上。 《外山》里に近い山⇔深山・奥山の反対</p>

<p>箭幹八幡宮と 尾根緑道 (東京都町田市)</p>	<p>箭幹八幡宮は推古天皇24年(615)創建されたと伝える。</p> <p>由緒書によると、康平5年(1062)源義家は前九年役において安部氏を討ち、奥州より帰る途中木曾に泊まったが病にかかり、毎夜悪鬼に責められる夢を見た。当社に祈願したところ、夢に神翁が現れ悪鬼を射倒すのを見て病は忽ち回復した。そこで神恩に報いるため本宮末社に至るまで尽く再興した。その時尾根に羽矢を挿入し、又境内に矢竹が繁茂していたことから、箭幹八幡宮と名づけ、この地を矢部と称したという。</p> <p>時代は下って平安時代、保元平治の乱に破れた源義賢は大蔵の館に拠り、これを迎撃した源義平は木曾仲三兼任、渋谷金王丸、鎌田正清等を率いて凶師原付近で会戦した。勝敗は容易に決せず両軍乱戦死闘となった。義平の軍が危うしと見えた時、突如老翁と童子が八幡宮の化身として現れた。神意を恐れた両軍は遂に社前で和睦を誓った。この時甲冑の根を埋めた所を根岸と名づけた。後小山田有重所領十七郷の総鎮守として尊崇されたという</p> <p>尾根緑道は町田市内を東西に走る多摩丘陵の稜線上に作られた尾根道で、町田リサイクル文化センターの所在地から最西端の大地沢までの約20kmの緑道が計画されている。59年度の事業計画ではそのうちの1.5kmの区間が整備された。この尾根道はかつての戦車道路の跡で、町田市が緑道として作り替えた。</p> <p>またこの緑道は18品種の桜を中心に構成された並木道で、入口から1.5kmの区間には早咲きから遅咲きの桜まで順に植えられ、できるだけ長い期間花が楽しめるようになっている。3月上旬～中旬の早咲きにはトウカイザクラやカンヒザクラが、3月下旬～4月上旬の中咲きには、エドヒガン、シダレザクラ、ベニシダレ、コシノヒガン、ヤエベニヒガン、ベニズルザクラ、オオシマザクラ、ソメイヨシノ、ヤマザクラが、また4月中旬～下旬の遅咲きにはヤエベニオオシマ、オモイガワ、シロタエ、ヨウキヒ、スルガダイニオイ、カンザン、フゲンソウ等がある</p>
<p>八王子子安 (金比羅)神社の 桜 (東京都 八王子市)</p>	<p>天平宝字3年(759年)、淳仁天皇の皇后・粟田諸姉(あわたのもろね)の安産祈願のために、橘右京少輔が創祀したと伝えられる。</p> <p>近郷の崇敬のみならず、多西郡(現在の多摩川の西側エリア)の総鎮守として武将の崇敬も篤かった。神社とその周辺の森には、八幡太郎義家(源義家)が奥州出兵の折、戦勝を祈念して櫻18本を奉納したとのいわれがあり、木を船形に植樹した事から「船森」と呼ばれる。</p> <p>鎌倉時代末期には、太平記にも記載のある人見四郎入道光行から神櫃を寄進され、また徳川三大将軍家光以降代々の将軍家から朱印を受けた事により、三つ葉葵を紋として使用している。</p> <p>度重なる焼失のため建物自体は再建を繰り返しているが、八王子に最も古くからある神社として、長く地元住民に親しまれてきた。船森の大木に囲まれた泉に湧く水は、俗称「明神様の泉」。「東京の名湧水」に選ばれるほどの名水で知られる。</p>